

小金井の湧水点 part 2

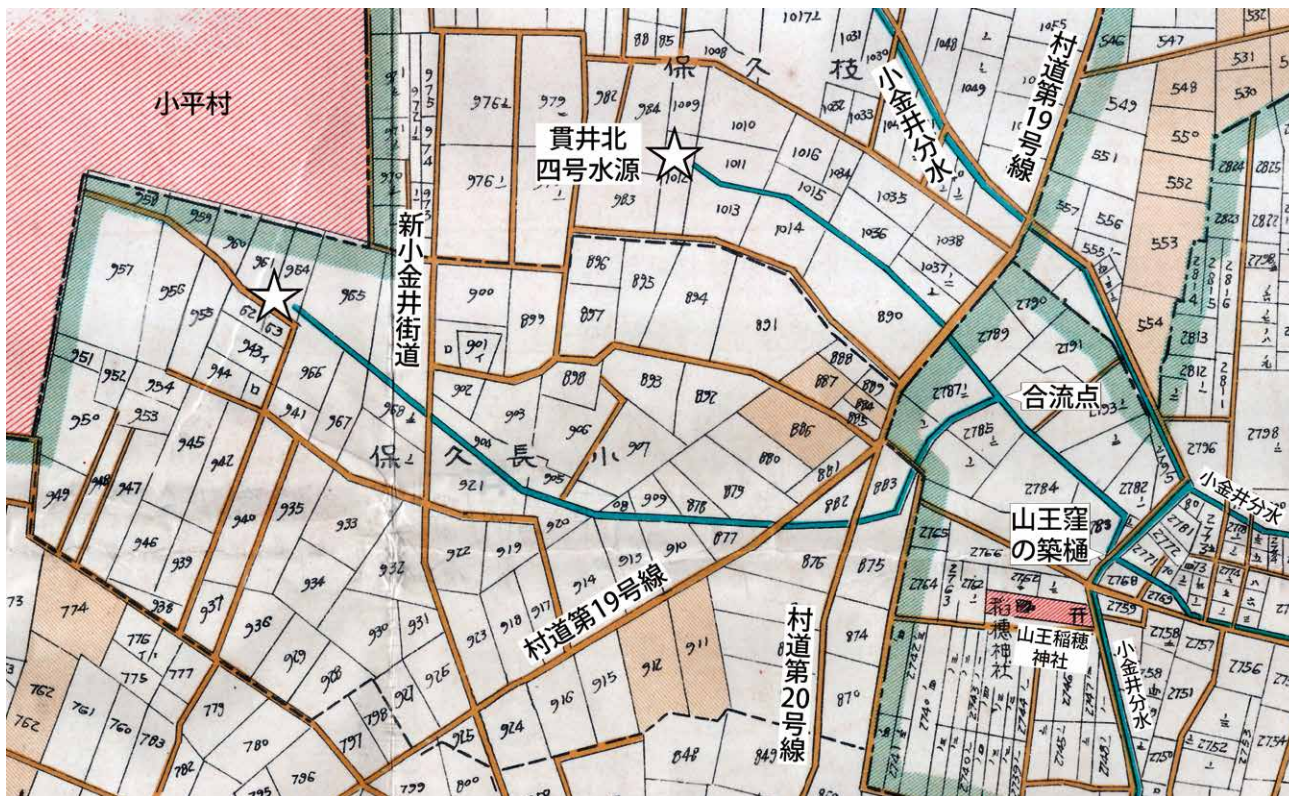
☆⑤ 旧仙川 2つの水源地

仙川は近世から「悪水」もしくは「悪水堀」と呼ぶのが一般的でしたが、戦後の小金井町報には「武蔵川」の名で記事が載っており、高度成長期を経てようやく仙川という名称が定着しています。名前は新しくとも古代小金井北部の地形形成に重要な役割を担った河川で、その水源地は小金井市域にありました。現在、仙川は新小金井街道と交わる地点を上流端としていますが、元の水源地は新小金井街道を越えてさらに西の東京サレジオ学園（小平市上水南町4-7-1）方面にまで遡ることが知られています。湧水点があった貫井北町3-12・13・15・16一带の中央はやや窪地になっている程度で、もはや水源地であった面影は殆どありません。このあたりまで仙川の源を訪ねてやって来る人も、仙川が度々改修を重ねており、元の仙川と現在の仙川では

さんのうくぼ つきどい
山王窪の築樋から西側の流路が異なることに注意を払う人は少ないようです。

そのうえ旧仙川と現在の仙川の違いは流路だけではありません。旧仙川の水源地は東京サレジオ学園方面だけではなく、もうひとつありました。現在、この水源地は貫井北四号水源の名で東京都水道局の管理下に置かれています。場所は貫井北町自転車保管所（貫井北町3-23-13）の南側、一見すると中央大学附属中学校のサブグラウンドの施設に思えますが、実際は水道局の施設です。流路は埋め立てられ、孤立した井戸水源として取り残されていますが、周囲の峡谷状の地形に古代の地形形成の跡が窺えます。

2つの水源地について文献史料は極めて乏しく、わずかに貫井村が明治13年8月12日に皇国地誌編纂のために政府に提出した『貫井村誌』（鈴木英男家文書98）の「悪水渠」の項に散見される程度



『小金井村全図』昭和7年（1932）

☆は旧仙川2つの水源地。どちらも小金井村の村域内にあり、東京サレジオ学園方面の水源地は小字「小長久保」に、貫井北四号水源は小字「枝久保」にあります。

です。それによれば、東京サレジオ学園方面の水源
地は「^{あざ}字小長久保ノ山林中ニ起リ」、貫井北四号水
源は「^{あざ}字枝久保ノ山林中ニ起リ」と2箇所記録して
おり、いずれも「^あ平^し時ハ水ナシ」、つまり普段は水
が涸れているとしています。2つの水源地とその流
路がある貫井の^{こあざめい}小字名は、どちらも「久保」の文字
を含んでおり、そこが旧仙川によって形作られた
「窪」であることを示唆しています。

東京サレジオ学園方面の水源地とその流路

⇒ ^{こあざ}小字「小長久保」の窪地を形成

貫井北四号水源とその流路

⇒ ^{こあざ}小字「枝久保」の窪地を形成

戦後になって市誌編さん委員会が編成されたのち
も、この2つの水源地は殆ど注目されていません。
わずかに昭和53年に刊行された『小金井市誌V
地名編』では、東京サレジオ学園方面の水源地を「東
京サレジオ学園北方の“お釜””と呼んでいます。「お
かま」もしくは「かま」は湧水点の方言で、例えば
質屋坂は別名「かま坂」と呼ばれましたが、これは
現在の小金井スカイコーポラス(前原町3-40-1)
敷地の北側から湧出していた「^{みづ}質屋の出水」に由来
するものでしょう。また同書では、貫井北四号水源
について「北方台地の崖面から夏場だけ湧出した泉」
と記しており、「北方台地の崖面」は、はなの木通
り南側の斜面を指していると思われます。

2つの水源地から流れ出た流路は、本町住宅の給
水塔があった付近で合流していました。この旧仙川
の二又に分かれた状態は、戦後の本町住宅(昭和
36年完成)造成以前まで変わっていません。合流
点で一本化した旧仙川は、さらに東南にある山王窪
の築樋で小金井分水の下を潜っていました。江戸期
になり玉川上水と小金井分水の分水網が敷設され、
飲料水や灌漑用水が確保されると、自然の河川であ
る仙川の位置づけは、悪水あるいは悪水堀の名のも
とに排水路になってしまいました。しかし、それ以
前は生活用水としても使われていたでしょうから、
流域に遺跡があったとしてもおかしくはありませ
ん。現在、小金井市域では山王稲穂神社周辺のみ小
金井市No.22遺跡として指定されていますが、他の
仙川流域にも包蔵地がある可能性は否定できな
いでしょう。



貫井北四号水源



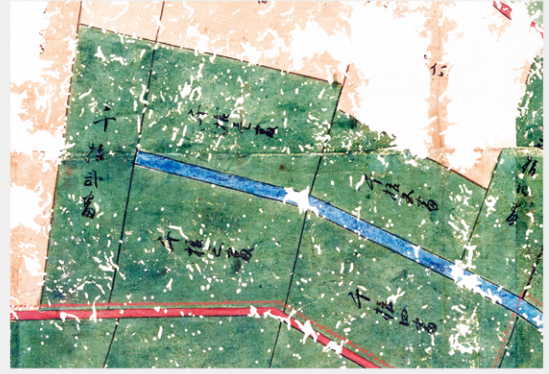
貫井北四号水源から「枝久保」の窪地を流れていた流路

東京サレジオ学園方面の水源地

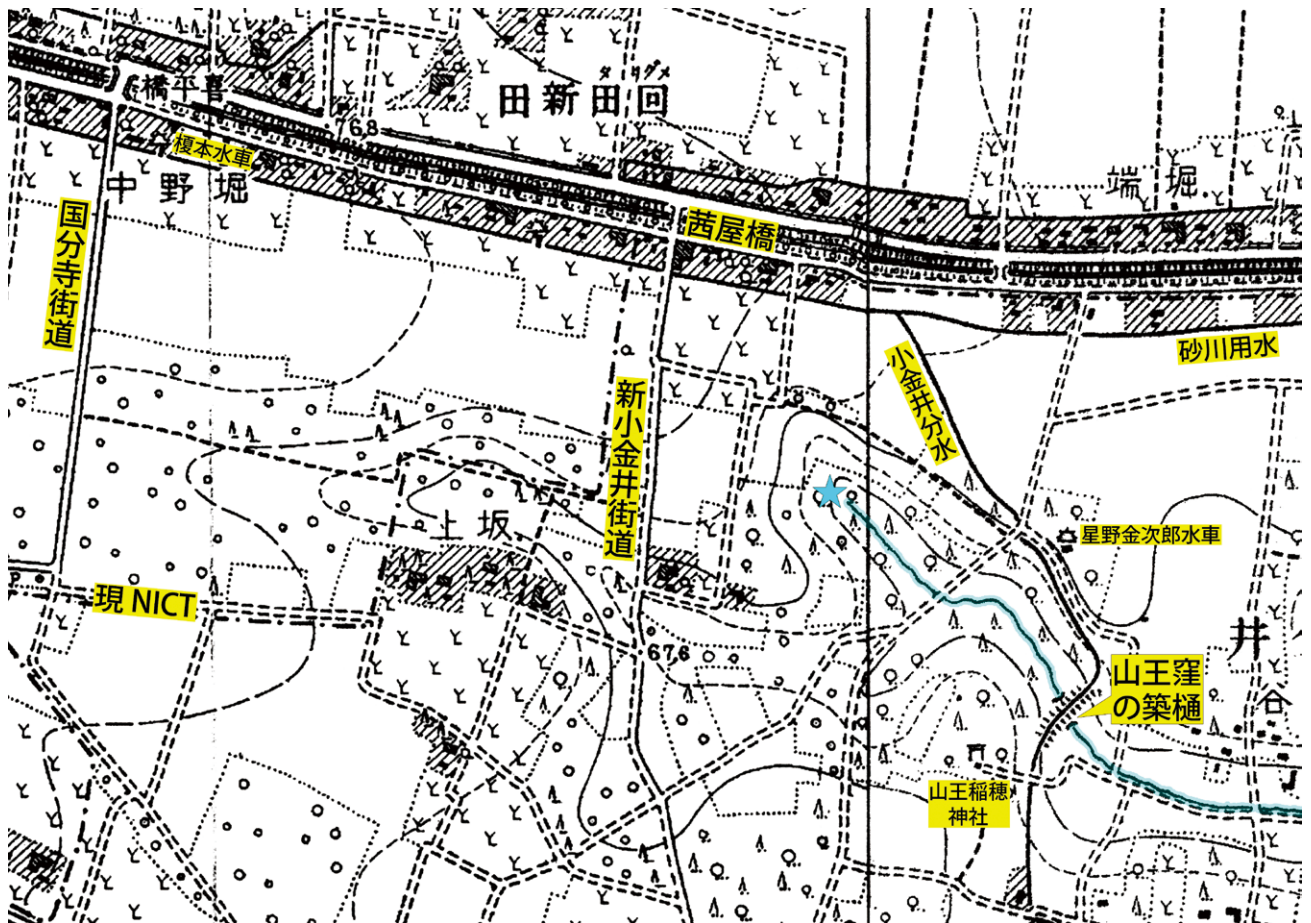


貫井村全図 板上
明治8年
(1875)

貫井北四号水源



小金井町土地宝典
昭和14年
(1939)



明治39年測図 1/20000 地形図 国土地理院

貫井北四号水源(☆)から山王窪の築樋に向かって流れる流路。なぜか東京サレジオ学園方面を水源地とする流路は記入されていません。とはいえ「板上」方面に向かう褶曲した等高線の突端、峡谷状の浸食地形を辿っていけば、おおよそ見当がつかます。

・貫井北四号水源付近 八雲神社

文献史料に欠くなら地図をもとに周辺状況を調べしかありません。近代的な測量技術により作成された最も古い貫井北部の地図は、当館で所蔵する明治8年に測図された『貫井村全図 坂上』で、地租改正後に作成された最初の貫井村の地図です。この地図を見ると貫井北四号水源から流れ出て合流点に向かい東流する水路を、幅2間の「小金井村境界通」と書かれた赤道が渡っていて、よく見ると橋が記入されています。ここは本町住宅7-2号棟があったあたりで、現在は水路も道路もありません。

橋の南側の桃色に塗られた土地(885番)は八雲神社で、現在の公務員住宅4・5号棟付近にありました。八雲神社の祭神は須佐之男命すさのおのみこととされていますが、神仏分離以前は疫病を鎮め退散させる牛頭天王ごずてんのうです。明治末期に貫井村総鎮守であった貫井神社に合祀されますが、その社殿は合祀後もこの地に残り、「天王さま」の名で親しまれていました。小金井市域では唯一、牛頭天王を祀る祇園信仰が旧貫井村に

あったわけです。

さて、当館で所蔵する『東京府北多摩郡小金井村明治44年度歳入出予算表』(島田良一家文書1013)には、「貫井天王橋」という橋が名前のみ記録されています。この橋の具体的な地番は書いていませんが、八雲神社付近の橋と見て間違いないでしょう。『貫井村全図 坂上』を見ると、八雲神社周囲で道路が水路を渡る地点は神社北側に1箇所、南側に2箇所あります。南側の2箇所は東京サレジオ学園方面を水源地とする流路を渡っていますが、橋は記入されていません。北側の1箇所は貫井北四号水源を水源地とする流路を「小金井村境界通」が渡る地点で、前述したように橋が記入されているので、この橋が貫井天王橋ではないかと筆者は推定しています。『貫井村全図 坂上』で橋が記入されている地点はあとひとつ、文政五年庚申塔の元の位置(貫井北町5-19-14)の道を挟んだ向かい側のみで、ここは玉川上水の分水、貫井分水(国分寺村分水)とのちの村道第19号線が交わる地点です。



貫井村八雲神社 明治15年(1882)
貫井北にあった八雲神社を描いた唯一の絵。大松と小さな社殿が見えます。

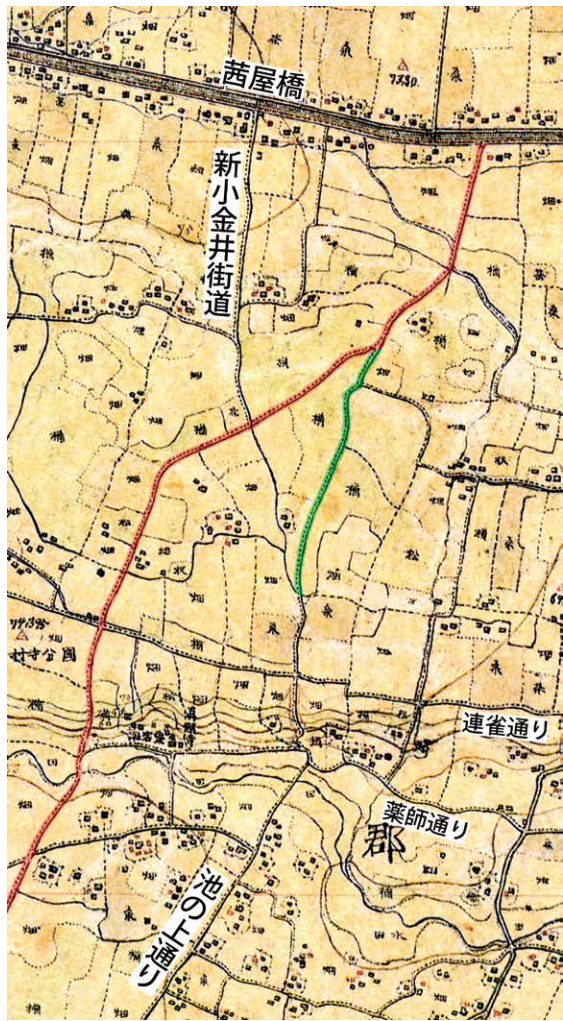


八雲神社 貫井神社境内
貫井北にあった社殿は古くなり、現在は破却されてありません。



『貫井村全図 坂上』明治8年(1875)

貫井村が小金井村とは別個に成立していた時代の地図。「小金井村境界通」はのちに村道第19号線に設定され、村道第19号線が村道第20号線と分岐する付近に八雲神社がありました。



2万分1 フランス式彩色地図 明治13年(1880) 国土地理院

甲武鉄道(現JR中央線)がまだ開通していない頃の地図。大正9年、小金井村役場は道路に路線番号を振り当て村道を設定しています。このとき貫井を南北に縦断する旧道のうち、赤色に塗った道路を村道第19号線、緑色に塗った道路を村道第20号線と設定しました。昭和12年、小金井は村から町になり、村道第19・20号線はそのまま町道第19・20号線として引き継がれました。昭和15年と17年、陸軍技術研究所の移転により技研用地内の町道第19・20号線は分断され廃絶します。現在、町道第19・20号線は途切れ途切れに市道として残っています。

小金井市道路管理課『小金井市管内図』平成31年4月1日現在より

<https://www.city.koganei.lg.jp/kurashi/482/doro/sinainoDourochousa.files/20190401kannaizu.pdf>

市道の路線番号を表示した『小金井市管内図』に加筆しています。白抜きの土地は陸軍技術研究所が強制買収した土地(技研用地)、赤色に塗った道路は旧町道第19号線、緑色に塗った道路は旧町道第20号線です。

町道第19号線⇒市道

技研用地外 市道第19号線・市道第580号線(旧路線番号 第19号線)
 技研用地内 市道第370号線の西側・市道第344号線(路線番号のみ)

町道第20号線⇒市道

技研用地外 市道第20号線
 技研用地内 すべて廃絶



・陸軍技術研究所 道路と水路の改変

昭和15年と17年、二度の強制買収により陸軍技術研究所は小金井と小平にまたがる地域に移転してきます。これは手狭になった新宿の百人町から、首都東京に近くより広大な敷地を求めた結果です。強制買収した技研用地内に残っていた八雲神社の社殿は邪魔になり、貫井神社に引き取られますが、これが現在、貫井神社境内にある八雲神社です。広大な技研用地は万年塀で囲われ、用地内の道路や水路は改造されました。例えば技研が敷設した学芸大構内の東西の直線道路は、新小金井街道を越えてナンジャモンジャ通りと呼ばれている市街地の道路につながっていますが、この碁盤のマス目状の道路は技研が造成したものです。市民は戦争遺跡という意識もなく日常的に使っていますが、技研が造成した道路は少なくとも江戸期にまでは遡る旧道を破壊し分断しているので、貫井北の地理的状況は技研移転の

前と後では全く様相を異にしています。特に貫井を南北に縦断する旧道の一部、町道第19号線と町道第20号線の分断はその最たるものと言えるでしょう。町道第20号線と分岐する地点より北側の町道第19号線は、『貫井村全図 坂上』で「小金井村境界通」と表現していた道です。

加えて技研は道路だけではなく、小金井のはげ上に人が住めるようになった大元である小金井分水の流路さえ改変しています。現在、一中の西側に残る逆L字型に曲がる水路がそれで、これもまた戦争遺跡といえるでしょう。今年発掘された上貫橋は昭和12年5月、技研改変以前的小金井分水を町道第19号線が渡る地点に架けられた橋です。それでは技研は仙川にも手を加えているのでしょうか。旧仙川2つの水源地を含む山王窪の築樋から西側の流路はすべて技研用地内ですが、疑わしいのは三研プール東側の流路です。京王バスのバス停「プール前」があ



昭和16年(1941)6月25日 陸軍撮影 国土地理院

☆は東京サレジオ学園方面の水源地。明治から昭和戦前の地図と同じく小金井市域内にあります。真上から撮影されていないため歪みがあります。



昭和22年(1947)11月14日 米軍撮影 国土地理院

仙川の流路は小金井にとどまらず、小平にまで及んでいるように見えます。

る場所には第三陸軍技術研究所の実験用プールがありました。その東には東京サレジオ学園方面の水源地から流れ出た流路があり、本来は幾分南側を緩やかにカーブして流れていたはずですが。昭和22年に米軍が撮影した空中写真にはうっすら元の流路が写っており、ここは現在、特別養護老人ホームぬく井の杜（貫井北町3-4-8）などがある場所です。

もうひとつ技研による改造が疑われるのは、東京サレジオ学園方面の水源地です。地形図を見ればわかるように、小金井市域を超えて小平にまで及ぶ峡谷状の浸食地形は古代仙川が形作ったものです。しかし、その水源地は『貫井村誌』では貫井村の小長久保にあり、小平村の野中新田善左衛門組ではありません。地図上の表記も明治から昭和戦前に至るまで、一貫して小金井の行政区画内にとどまっており、それは昭和16年に陸軍が撮影した空中写真を見ても確認できます。ところが昭和19年陸軍撮影や昭和22年米軍撮影の空中写真では、小金井を超えてさらに西の小平にまで流路が延伸しているように見えます。ここは現在、東京サレジオ学園やサレジオ通り北側の情報通信研究機構（NICT 貫井北町4-2-1）の林地がある場所で、前述した「東京サレジオ学園北方の“お釜”」がそれに当てはまります。つまり時代が下ると、水源地が峡谷状の窪地を西へ移動しているように見えるのです。何とも不可解ですが、おそらくは技研が造成工事に着手した前後で、元の水源地の位置すら小金井なのか小平なのか曖昧になってしまったのではないのでしょうか。ちなみに昭和22年の空中写真には、流路を南北に渡る道路が写っています。現在は市道第381号線と付番されているこの道路は技研の造成によるもので、学芸大が総合グラウンドを造る前は、学芸大構内中央の南北道路と一体の道でした。学芸大北側の北大通り（サレジオ通り）を皮切りに技研の道路造成が始まったとする証言（星野正行談）もあり、この水源地

周辺は当初から改造が計画されていたのかもしれませんが。

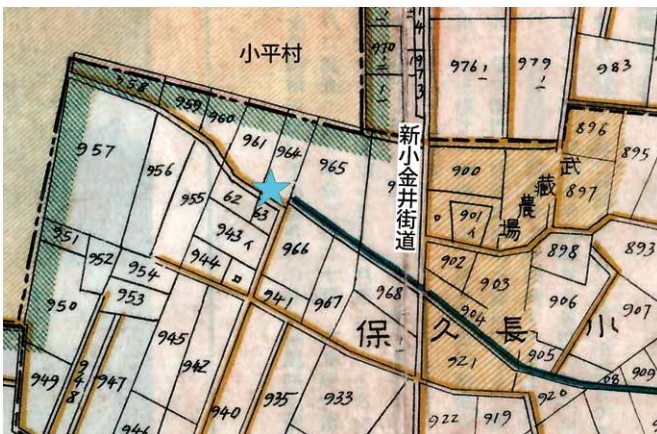
・仙川と道路 戦後の改修

戦後、高度成長期になると仙川の流路は大幅に手が加えられます。山王窪の築樋以西の流路は本町住宅（昭和36年完成）の造成に先立ち改修され、二又に分かれていた流路はこの時はじめて一本化されました。貫井北四号水源を水源地とする流路は埋め立てられ、東京サレジオ学園方面を水源地とする流路は山王稲穂神社がある台地をよけて急激に北上して合流点に向かっていましたが、より緩やかに山王窪の築樋まで東流する水路に付け替えられています。

仙川のみならず道路も技研の後を受けて戦後に改修され、技研用地内にもかかわらず残されていた町道第19・20号線も廃止されます。例えば町道第19号線の一部であった市道第344号線は、本町住宅を造成するために潰されています。昭和33年の市制施行以降に廃止され、路線番号のみが残るこの道は、『貫井村全図 坂上』では「小金井村境界通」であり、貫井北四号水源を水源地とする流路を渡る橋（貫井天王橋？）があった道です。市道第344号線は本町住宅北側の敷地を横切っていたわけですが、ここは現在、（仮称）コーシャハイム小金井本町に建て替え工事中です。

小金井市域の仙川の流路の変遷を顧みると本町2丁目交差点周辺のように、枝分かれして迂回する流路を埋め立てたり地下水路化していたりする区間があります。しかし2つの水源地を含む山王窪の築樋以西のように、流路自体の抜本的な付け替えを行っている区間は類を見ません。この一帯は大規模な改造を施しているにもかかわらず、データが不足し多くの謎に包まれています。安易に現代の仙川から類推して、古代からの歴史を考えることのないように留意すべきでしょう。

【以下、次号に続く】



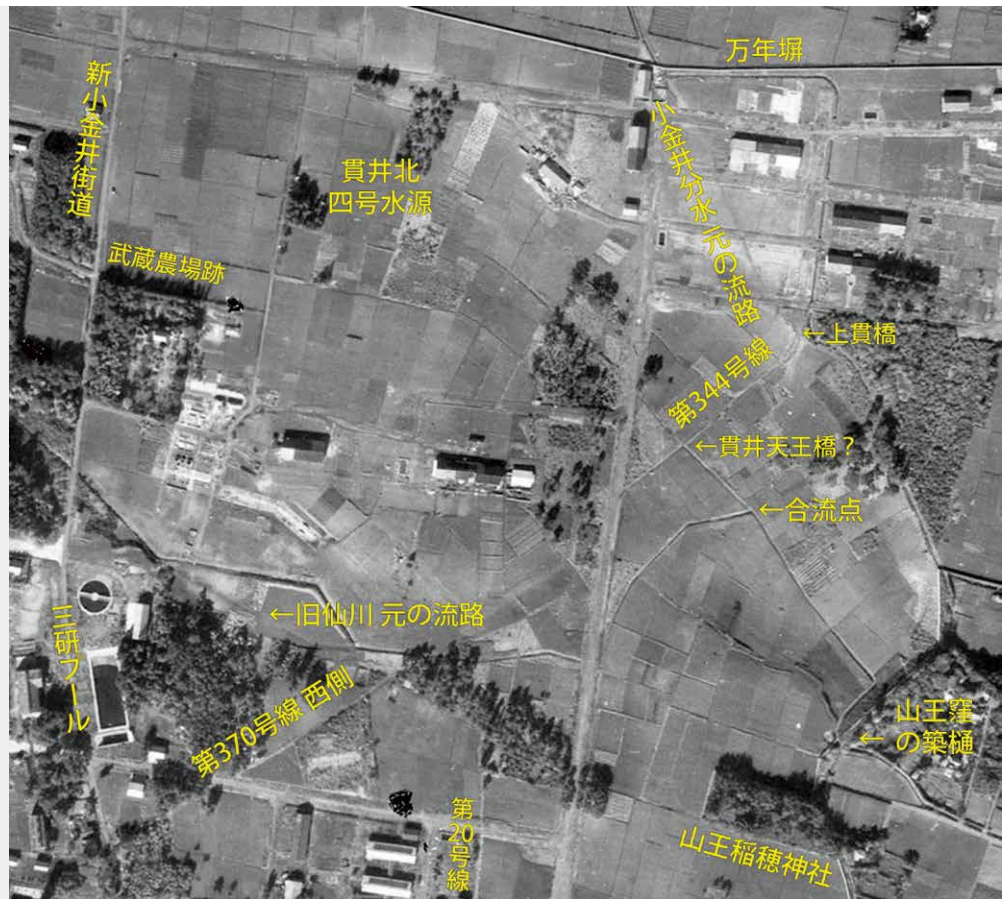
『小金井町全図』昭和12年（1937）

☆は東京サレジオ学園方面の水源地で小金井町の町域内にあります。仙川が敷地を横切る武蔵農場は、シッカロールで有名な和光堂初代社長大賀彌二（1875～1942）によって設立された牛乳の生産直売農場。昭和17年に決行された技研二度目の用地買収の際、大賀氏は国のために武蔵農場の土地建物をすべて寄付しています。

昭和22年(1947)11月14日
米軍撮影 国土地理院

小金井分水や旧仙川の元の流路がうっすら写っています。小金井分水の流路は分岐水門から南下して万年堀の内側、つまり技研用地内に入った途端、逆L字型に曲げられています。上貫橋は小金井分水の元の流路に架けられた橋で、昭和12年5月に築造されたのち、数年後には技研が小金井分水の流路を逆L字型に改変しているので、利用された期間は短くははずです。

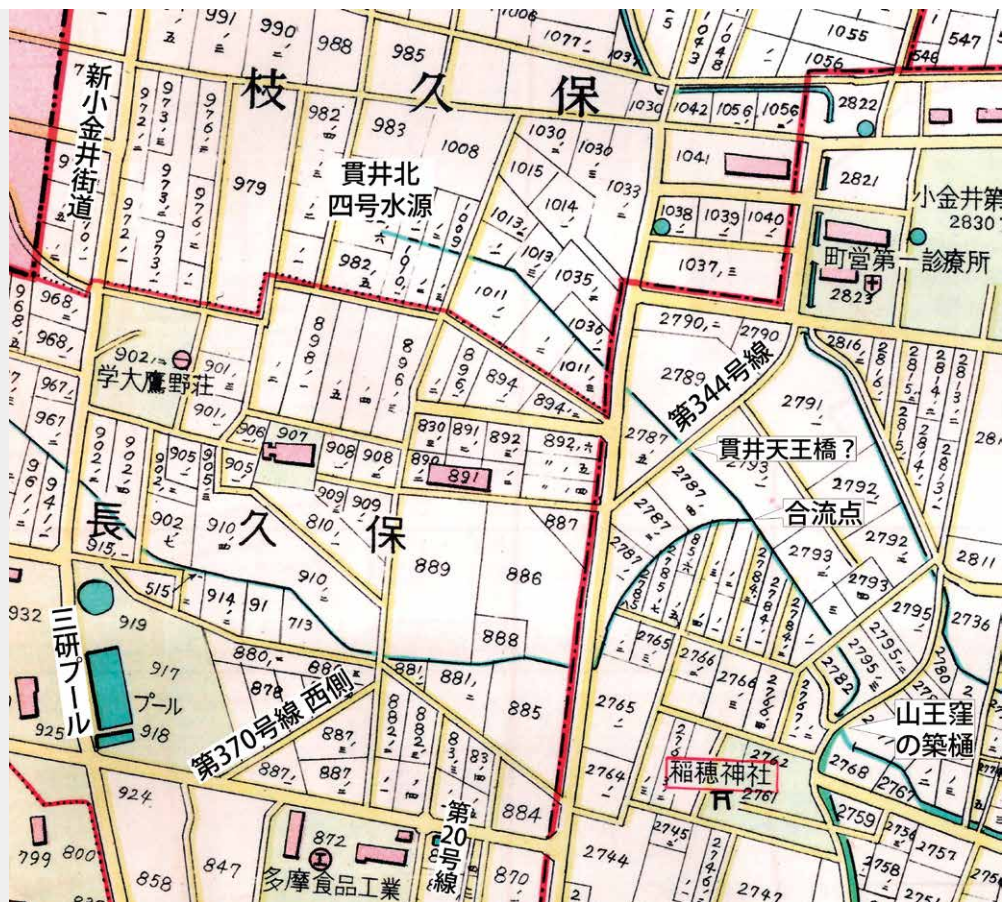
東京サレジオ学園方面の水源から東流していた旧仙川の元の流路は、新小金井街道を超えたあたりで本来は緩やかにカーブしていました(1頁『小金井村全図』参照)。それがこの空中写真では三研プールの東側で、やや北側に付け替えられているのが分かります。



『小金井町全図』

昭和30年(1955)

地図上の「学大鷹野荘」は、このあたり一帯が尾張徳川家の鷹場だったことに因み学芸大が命名したものです。ただしその建物は学芸大が建築したものではなく、元は武蔵農場の敷地内にあった大賀彊二の自宅です。藤棚がある庭園付きの木造二階建て和風建築で、技研はこれを将校集会所として利用し、戦後は学芸大が家庭科教室として利用しました。その後、大賀彊二未亡人すゑ子氏に返還されましたが、分譲地化され取り壊されています。現在、学芸大にある鷹野荘はその名前を引き継いだ校舎です。



小金井市文化財センター通信 No.2

小金井の湧水点 part 2
文/構成 多田 哲 (学芸員)

令和3年11月1日発行

小金井市文化財センター

(旧 浴恩館)

小金井市緑町3-2-37

(浴恩館公園内)

☎ 042-383-1198